

## 「みんなで作る形と空間」展の成果と課題

### ーワークショップ型展覧会の比較考察を通してー

蝦名敦子

小論は、子どもの造形活動と空間の関わりに焦点をあてた考察の一環である。これまで筆者が企画・実施した展覧会と対比させながら、2017年8月に行ったワークショップ型展覧会「みんなで作る形と空間」展について振り返り、子どもの造形活動と空間の問題について考察する。そして、本展覧会の成果と課題について抽出した。尚、本稿では、作品制作に伴う「造形空間」と、展示によって表現される「展示空間」について、言葉の意味を限定しながら考察した。

本展覧会はワークショップ型の展覧会で、来場した子ども達がいつでも活動でき、そこで造形的空間を創って楽しむという場である。展覧会名も「みんなで作る形と空間」展とした。子どもも大人も一緒になってつくる造形空間である。そのために今回はフリースペースを用意し、動きやLEDライトによる光の効果も盛り込んだ。そこで成果として得られたことは、以下である。

1. 子どものスペースを展示空間と分けて設けたが、彼らは子ども同士でつくるというよりも、大人と一緒に造形空間になることを求めた。夜に光を付ける時には、子ども達が自分の作った作品を持ち出して、一緒に空間の中で展示し、光と影の効果を楽しんでいた。

2. 小学校児童においては「動き」に対する興味・関心が非常に高い。小学校低・中学年は体全体で造形物と触れ合い、それらに触れて手で動かしたり、その中に入り込んだり、無理だと思ふような狭い空間をむしろ楽しんでいた。

3. 動きを支える「立つ形」の制作は非常に難しい。特に子ども達が安心して動かしたりして、安全に触れることができる造形に苦慮した。強力な吸盤を使用したけど、子ども達が一気に触る手の動きに耐えながら、3日間立ち続けることは困難であった。また、遊具として大きな球体を作ろうとしたけど、大きくなればなるほど下に加重がかかるため、重みで崩れ、形体の保持が難しかった。紙を丸めて作る棒の丈夫さも配慮しなければならない。本展覧会では、遊具の一部をあえて未完成にして途中の形にしておき、来館者が付け足して作っていきけるようにしたが、ここに工作や中学校彫刻、技術科の内容が大きく関わってくることを確認された。

4. 新たな発見として、光を当てる角度や視点により、人がライトを持って動くことで、映し出される影もそれに応じて多様に動く。そこで思いがけない影の造形を楽しむことができた。さらにその影の動きから、去りゆく時間や奥行きを強く感じることができる。映し出された影からもそこに空間を感じることもでき、影による造形空間を味わうことができた。

今後は「形をつくる」方向性をより強め、イメージの問題に関連づけてみたい。子ども達の見立てる世界に造形活動を焦点化することが次の課題である。